


業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備((1)－①)		
【事業概要】			
文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図り、システムの面から文化財に関する専門的アーカイブの充実、データベースの充実を支援する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
【スタッフ】			
山梨絵美子（部長）、津田徹英（文化財アーカイブズ研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、小林達朗（文化形成研究室長）、皿井舞（主任研究員）、安永拓世（研究員）、橘川英規（研究員）、城野誠治（専門職員）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、小山田智寛（研究補佐員）、高橋佑太（研究補佐員） 広報委員（情報システム部会）： 川野邊渉（文化遺産国際協力センター長） 各部門情報システム部会員：平出秀文（研究支援推進部管理室長）、中濱拓郎（契約係長）、皿井舞、飯島満（無形文化遺産部長）、吉田直人（保存修復科学センター保存科学研究室長）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター国際情報研究室長）			
【主な成果】			
<p>(1) 所内ネットワークシステムの日常管理業務を行った。</p> <p>(2) センタースイッチ、フロアスイッチの更新及び双方を接続するケーブルの追加を行った。また、無線 LAN のアクセスポイントを追加し、アクセスポイントを制御するサーバを新たに設置した。</p> <p>(3) 大容量ストレージ構築のための基本的なシステムを導入した。</p> <p>(4) 日常管理及び機器の適切な更新により所内ネットワークシステムの安定的運用を行うことができた。また、機器更新における高い費用対効果により、長期にわたり懸案となっていた大容量ストレージの導入に着手することができた。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 所内ネットワークシステムを安定的に運用するため、ネットワーク接続やソフトウェアの利用等の状況のモニタリング、ウィルス対策ソフトウェアの更新を含む日常管理業務を行った。また、国立文化財機構の情報化委員会からの情報システムセキュリティ対策に関連した設定変更等の要請にも速やかに対応した。</p> <p>(2) 設置から10年近く経過していたセンタースイッチを更新した。センタースイッチの更新に関連して、東京文化財研究所の現在の庁舎新営時から敷設されていた、センタースイッチとフロアスイッチをつなぐ光ケーブルをメタルケーブルに変更することによって、接続速度を下げることなく選定可能な機器の価格を大きく下げられることがわかった。そこで、両スイッチを接続するケーブルとしてメタルケーブルを追加し、併せてフロアスイッチも更新した。更新する機器やケーブルが増え、ケーブルの敷設工事が新たに発生したものの、更新・追加費用の総額は、従来の光ケーブルを使ってセンタースイッチのみを更新する場合に比べて半分未満となった。そのため、所内ネットワークシステムの安定的な運用をコストの大幅な削減と両立する形で実現することができた。</p> <p>(3) 無線 LAN による接続状況を調査し、必要な位置にアクセスポイントを追加して接続の改善を図った。また、26年度導入した仮想サーバに無線 LAN アクセスポイント制御のためのサーバを設置することで、運用の安定化を図ることができた。</p> <p>(4) 高精細画像情報を主な対象とする大容量ストレージの運用を可能とする基本的なシステムを導入した。これは、費用対効果の高いセンタースイッチ・フロアスイッチを導入したことにより、導入着手が可能となったものである。大容量ストレージはその導入が懸案となっていたものの、これまで検討されていたストレージは必要な容量全体を一度に導入するタイプのものであったため、費用も高額であった。しかし、今回導入に着手したシステムはストレージサーバを追加しても全体を1台のストレージとして認識させることが可能であり、また機種を特定しないことから、徐々にストレージサーバを追加し容量を増やしていくことができる。</p>			
			
			ストレージサーバ
【実績値】			
ネットワーク機器更新 1件 大容量ストレージ基本システム構築 1件			
【備考】			

【書式B/研・セ】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6111

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	発展性		
評価	B	B	B	A		
判定理由 適時性：適切な時期に機器及びシステムを更新することができた。 効率性：センタースイッチとフロアスイッチを接続するケーブルの種類を光からメタルに変更することにより、接続速度を下げることなく選定可能な機器の価格を大きく下げることができた。光ケーブルは撤去せず残しておくことで、今後の更新の際に状況が変化し、光ケーブルでの運用に戻す必要がある場合でも対応可能にした。 継続性：継続的にネットワークシステムを運用することができた。 発展性：基本的なシステムを導入し、今後ストレージサーバの追加によって大容量ストレージに発展させることが可能な基礎を構築した。						

2. 定量的評価

観点	ネットワーク機器更新	大容量ストレージ構築				
評価	B	A				
判定理由 ネットワーク機器更新：予定通りセンタースイッチを更新することができたため。 大容量ストレージ構築：当初の計画にはなかったものの、節約により大容量ストレージ運用のための基本的なシステムを追加することができたため。						


3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	情報システムの整備については、老朽化したネットワーク機器の更新及び大容量ストレージの基本システムの導入によりセキュリティの強化及び高速化、経費の縮減が図られた結果、適時性、効率性、継続性、発展性が向上したと判断した。28年度以降も、ネットワークの安定運用と効率化、利便性の向上を図り、また他の関連施設の状況についても広く調査した上で、蓄積した文化財調査研究情報の公開のための環境を整備する。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	情報システムの整備については、セキュリティの強化及び接続速度の高速化を図るに当たり、利便性を保った上でより効率的な運用ができるよう、ネットワーク環境の段階的な更新をさらに進めた。次期中期計画においても、現有のスタッフの能力を最大限に活用し、各部・センターのエンドユーザの意見を適宜取り入れることは調査研究遂行の上で有益であり、かつ費用対効果の高い機器の導入とその安定的な運用に努める。

業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化((1)－①)		
【事業概要】	<p>無形文化遺産部が所蔵する音声・画像・映像資料のデジタル化。第1期中期計画（17年度終了）の事業案策定後の購入・寄贈にかかるアナログ資料を中心に、これまでに収集蓄積してきた分野を補完する資料の媒体転換を重点的に実施する。併せて、デジタル化を済ませた音声資料は、インデックス付与を含む整理を推進する。この事業は、将来的には資料のデータベース公開と音声・画像等の配信を目指すものである。</p>		
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長 飯島 満
【スタッフ】	<p>高桑いづみ(無形文化財研究室長)、久保田裕道(無形民俗文化財研究室長)、石村智(主任研究員)、菊池理予(研究員)、今石みぎわ(研究員)、佐野真規(アソシエイトフェロー)、橋本かおる(研究補佐員)</p>		
【主な成果】	<p>無形文化遺産部所蔵資料の内、映像資料に関しては、26年度に引き続き、旧芸能部の年代に作成された映像資料の媒体変換を実施した。 アナログ音声資料に関しては、オープンリールとカセットテープについて、収録内容の確認を含めた整理を行った。</p>		
【年度実績概要】	<p>映像資料については、再生不可となることが危惧されるHi8(ハイエイト)を中心に媒体変換を行い、DVD22枚を作成した。 音声記録のデジタル化は、26年度に引き続き、1960年代に放送された純邦楽関連のテープ録音を中心に収録内容を確認した。また民謡テープ109本(約74時間)についてもデジタル化を実施し、収録内容の確認を行った。 カセットテープに関しては、旧芸能部所蔵テープの内、寺事の現地録音を中心に内容確認を行った。 無形文化遺産関連の映像資料362枚(作成DVD140枚・作成BD222枚)を所蔵資料として新たに登録した。</p>		
			
<p>兵庫県三原郡南淡町亀岡八幡神社「阿万の風流踊」平成4年9月15日 (Hi8から媒体変換した動画資料より)</p>			
【実績値】	<p>媒体転換済みテープ(音声資料)109本 DVD・BD(映像資料)362枚</p>		
【備考】			

【書式B/研・セ】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6112

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性	発展性		
評定	A	B	A	B		
判定理由 適時性：無形文化遺産部は、旧芸能部時代に収録されたHi8（ハイエイト）規格のデジタルテープを相当数保管しているが、このHi8は23年9月に再生機の出荷を終了した規格であり、早急な媒体変換は課題のひとつであった。民俗芸能を中心とする1990年代の貴重な映像資料を、対処可能な時期にデジタル化できた意義は大きい（28年度も継続）。 独創性：他の公的機関では所蔵されていない資料の恒久的な利用に向け、処理をおこなっている。 継続性：アナログ資料の継続的な媒体変換とともに、資料整理も着実にすすめている。 発展性：将来の資料公開に備え、資料の蓄積に努めている。						

2. 定量的評価

観点	媒体変換済みテープ（音声資料）	DVD・BD（映像資料）				
評定	B	B				
判定理由 媒体変換済みテープ：一ヵ月に処理できるのはオープンリールテープ10本ほど（約10時間）であり、十分である。 DVD・BD（映像資料）：DVD、BDともに例年なみの枚数を登録できた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価、定量的評価ともに、これまでの水準を維持していることに加え、早急な媒体変換が必要とされていたメディア（Hi8）についても、デジタル化作業に着手できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	音声・映像資料のデジタル化事業は、従来水準を維持している。一方で、ここ数年オープンテープやVHS等の旧式メディアの寄贈依頼が増えており、整理作業が追い付かなくなっている。音声資料については、媒体変換をCD納品ではなくHDD納品に移行しつつあるが、より一層の効率化を図る必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実(①-①)

【事業概要】

文化財情報の特性について具体的な資料の研究に基づいて検討を加え、それに最も適した電子化・情報化の方法を探り実際のデータベース入力を進める。

【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	企画調整部長 杉山洋
--------	-------	-------------	------------

【スタッフ】

森本晋 (文化財情報研究室長)

【主な成果】

文化財情報の電子化に関する研究を基にして改良を継続している各種データベースについて、業務用とともに公開用についても、データの充実を図った。文化財情報の整理・分析に地理情報システム (GIS) を活用する研究を継続して行い、成果を学会で発表している。

【年度実績概要】

- 文化財情報電子化の研究として文化財の記述における用語の問題を扱い、成果を27年11月13日に「文化研究への科学技術の応用に関する国際研究会」(IWASTCS)で発表した。GISの技術を活用した考古情報の整理分析に関する調査研究を行い、成果を27年10月10日に地理情報システム学会で発表した。資料調査として関連学会の中でも重要な「考古学におけるコンピュータの応用と数量的方法(CAA)」に27年3月30日から4月3日の間参加した。
- 文化財情報データベースの充実として、従来より進めている遺跡、写真、報告書抄録、航空写真、図面画像、考古関連雑誌論文情報補完の各データベースに関して、データの入力・更新をおこなうとともに、新規に和同開珎データベースを作成した。

The screenshot shows a web-based database interface for '和同開珎データベース'. It features a search bar at the top and a table of records below. The table has columns for 'ID', '名称', '所在地', '所属', '種別', '年代', '規模', '面積', and '説明'. The records listed include various archaeological sites such as '584 大内宿', '585 大内宿', '586 大内宿', etc., with their respective locations and details.

和同開珎データベース

【実績値】

研究発表件数 2件 (①、②)

(参考値)

データベース件数 27年度末 ただし () 内は26年度末の値

全文 213, 772 (213, 667)、木簡 164, 282 (159, 834)、抄録 91, 042 (84, 562)、写真 575, 087 (542, 402)、遺跡 480, 021 (479, 239)、航空写真 1, 381, 527 (1, 374, 612)、図面画像 263, 444 (172, 123)、考古関連雑誌論文情報補完 88, 075 (71, 891)

【備考】

研究会発表

- ①村尾吉章・森本晋・藤本悠・清野陽一・玉置三紀夫「地理情報標準に準拠した時間属性定義の拡張」『日本地理情報システム学会第24回研究発表大会予稿集』27.10.10
- ②Mamoru SHIBAYAMA, Susumu MORIMOTO, Creating Archaeo-Ontology based on the Archaeological Inventory (口頭発表) IWASTCS2015, 27.11.13

【書式B/研・セ】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6113

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：逐次刊行される発掘調査報告書の記述内容を参照してデータ入力を進めており、適時性は十分にある。 独創性：当研究所が独自にデータベースを設計・開発して、研究業務に資するとともに、公開も進めており独創性が高い。 発展性：データベースに関する調査研究を進めながら、新規のデータベース開発も行っており、発展性がある。 効率性：データベースの種類を増やしつつ、入力件数も増やしており、効率性は増している。 継続性：各種データベースを最新情報に従って更新しながら、公開サービスを継続して提供しており成果が高い。 正確性：データの入力・更新に際しては、典拠資料の調査を行っており、正確性は担保されている。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数					
評定	B					
判定理由 研究発表件数：継続的な研究の成果を年間1件ないし2件、早期に公表するという予定を満たしており、目標を達成した。						


3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は、定性的な観点（適時性・独創性・発展性・効率性・継続性・正確性）のいずれにおいても、十分な水準を維持しており、また、定量的な観点も基準を満たしている。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	各データベースについて、データの充実を着実に進めており、新規データベースの開発も行うことができた。全体として当初計画通りに進捗して所期の目標を達成している。今後も、確実なデータによる個々のデータベースの充実を進めるとともに、新規データベースの開発を行っていく。

業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	被災文化財関連情報に関するデータの蓄積・分析及び情報発信((1)－②)		
【事業概要】			
被災文化財関連情報に関するデータベースの充実とアーカイブ機能の更新と拡張を図る。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
【スタッフ】			
山梨絵美子（部長）、皿井舞（主任研究員）、橘川英規（研究員）、安永拓世（研究員）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、小山田智寛（研究補佐員）、 文化財レスキュー旧事務局・日報担当： 岡田健（保存修復科学センター長）、皿井舞（主任研究員）、久保田裕道（無形民俗文化財研究室長）、菊池理予（無形文化遺産部研究員）、今石みぎわ（無形文化遺産部研究員）、森井順之（保存修復科学センター主任研究員）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）吉原大志（アソシエイトフェロー）、佐野真規（アソシエイトフェロー）、			
【主な成果】			
(1)2015 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 奈良において「東日本大震災レスキュー活動日報の分析および将来に向けた提案」と題してポスター発表を行った。			
(2)被災文化財レスキュー日報の様式について現場経験を踏まえての改善点について協議した（27年6月22日）。			
【年度実績概要】			
(1)東日本大震災救援活動の日報と写真についてこれまで行ってきた協議を踏まえ、2015 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 奈良において「文化財研究情報アーカイブの構築—東京文化財研究所の取り組み」と題してポスター発表を行った。			
(2)26年までに協議を行いモデル版を作成した被災文化財レスキュー日報の様式について現場経験を踏まえての改善点について協議した（27年6月22日）。			
			
発表風景			
【実績値】			
成果発表件数：ポスター発表 1件			
【備考】			

【書式B/研・セ】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6121

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：23年の東北地方太平洋沖地震の発生から4年が経過したに過ぎず、東海・東南海地震の発生が近いとされている現在、文化財レスキュー事業に関する情報を整理・公開することは時宜にかなっている。 独創性：扱っているのは文化財レスキュー事業事務局としての業務を通じて収集したデータで、他にない情報である。 発展性：文化財レスキュー事業における活動に関してまとめることで、将来起こりうる大災害への対応に関して活用可能な情報とすることが可能である。 効率性：情報の蓄積・整理・公開については主に職員が担当していることから、外部委託等の支出なく実施している。 継続性：当該事業は東日本大震災以降継続して実施している。 正確性：情報発信にあたっては、複数の職員が確認し正確性の確保に努めている。						

2. 定量的評価

観点	成果発表件数					
評価	B					
判定理由 成果発表件数：国際学会の場でポスター発表を行うことができたため。						


3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的、定量的評価いずれについても所期の目標を達成していると判断した。新しい中期計画による28年度以降についても、引き続き、文化財レスキュー事業で蓄積した情報を中心とした情報の分析と関係者間での共有、発信を継続する。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財レスキュー事業に関する情報をまとめ、関係者間での共有のための仕組みを構築するとともに、成果を公開することができた。新しい中期計画による28年度以降も資料の蓄積や共有、発信を行うことで、文化財レスキュー事業に関する分析を行うことで、今後の文化財防災に役立つ資料を提供していく。

業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	専門的アーカイブの充実（資料閲覧室運営）（(1)－③）
<p>【事業概要】文化財関連資料の公開機関としての周知の広がりやを踏まえ、①受け入れた文化財関連の図書などの文字資料や、作成したアナログ・デジタル画像資料の登録管理、②閲覧室で月・水・金の週3回の一般利用者へ所蔵資料の提供、③データベースの作成、検索システムの構築・ウェブサイト上での諸情報の提供を通常業務とするとともに、提供する資料や情報の質に主眼を置き、より専門性の高い文化財関連資料や情報の収集・構築・公開の場として専門的アーカイブの充実を図る。</p>	
【担当部課】	企画情報部
【プロジェクト責任者】	文化財アーカイブズ研究室長 津田徹英
<p>【スタッフ】山梨絵美子（部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（文化形成研究室長）、皿井舞（主任研究員）、安永拓世（研究員）、橋川英規（研究員）、城野誠治（専門職員）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、田所泰（アソシエイトフェロー）、吉田千鶴子（東京芸術大学非常勤講師・客員研究員）、片山まび（東京芸術大学准教授・客員研究員）、久保田裕道（無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長）、早川泰弘（保存修復科学センター分析科学研究室長）、</p>	
<p>【主な成果】</p> <p>(1) 文字情報・画像資料のデジタル化と目録化を継続しておこなった。 (2) 明治・大正期刊の雑誌類のデジタル化を継続しておこなった (3) より広く当研究所の情報を発信するために国内外の機関との連携を模索した。 (4) 資料閲覧室の公開・運営を行った。</p>	
<p>【年度実績概要】</p> <p>(1) 当研究所が架蔵する展覧会図録の韓国語データ入力を行った。 ・当研究所が架蔵する美術館・博物館等の館報の入力を行った。 ・東京美術倶楽部と共同研究を行い、戦前刊行分の売り立て目録のデータ入力を行った。 (2) 貴重書(山中商会の売り立て目録)のデジタル化を行い、公開準備をすすめた。 (3) 英国セインズベリー日本藝術研究所採録の日本美術および同研究に関する英語文献・記事情報を「東京文化財研究所総合検索」で利用できるようにした。 ・27年6月に皿井主任研究員、田中副所長がアメリカ・ゲッティ研究所に赴き、連携内容を協議した。 ・27年5月、7月、28年3月に国立西洋美術館と連携内容を協議し、図録情報のOCLC搭載のための協議を行った。 ・JALプロジェクトの一環として日本に招聘された海外日本美術史料専門家（司書）との意見交換会を行い、当研究所のアーカイブシステムのモニタリングを行った（27年11月18日）。 ・英国セインズベリー日本藝術研究所採録の日本美術および同研究に関する英語文献・記事情報を「東京文化財研究所総合検索」で利用できるようにし、併せて、2月には田中副所長と津田室長が現地に赴き運用面での協議を行った。 (4) 資料閲覧室を公開・運営した（合計134日、利用者のべ954人）。 ・文化遺産国際協力センターが架蔵していた図書を搬入し、資料閲覧室で一元管理・公開を行うようにした。</p>	
 <p>ウェブサイトにおける東京文化財研究所 総合検索</p>	
<p>【実績値】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料受入数：和漢書 1,306件、洋書 33件、展覧会図録・報告書等 4,264件、雑誌 1,580件（合計 7,183件） ・データベース公開件数：「東京文化財研究所 総合検索」（25件のデータベースの横断総合検索） ・閲覧室利用状況：公開日総数 134日・年間利用者合計 954人 	
<p>【備考】</p>	

【書式B/研・セ】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6131

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	A	A	B	B	A
判定理由 適時性：研究活動の透明性が要請される昨今の情勢を踏まえつつ、国内外の研究機関との連携を進めることで、研究所の活動と研究成果を広く周知することができた。 独創性：文化財情報に特化して汎用性のある情報のデータベース化を行った。 発展性・効率性：国内外の研究機関との連携を進めることで、研究所のもつ文化財情報を広く発信し、接し得る機会を増やすことができた。 継続性：文字情報・画像資料のデジタル化と目録化を継続的に行い、文化財の研究情報を広く提供するとともに、あわせて資料閲覧室としての公共性と特性に沿った運営を行い、週3回、一般利用者へ所蔵資料の提供を行った。 正確性：貴重書のデジタル化を行うことで、画像での資料公開により内容の正確性を確保するようにつとめた。						

2. 定量的評価

観点	資料受入数	データベース公開件数	閲覧室利用者数			
評価	B	A	B			
判定理由 資料受入数：和漢書 1,306 件、洋書 33 件、展覧会図録・報告書等 4,264 件、雑誌 1,580 件（合計 7,183 件） データベース公開件数：「東京文化財研究所 統合検索」（25 件のデータベースの横断検索） 閲覧室利用状況：公開日総数 134 日・年間利用者合計 954 人 いずれも適切なものと判断する。特に文化財情報に関連した25件のデータベースについて内容を充実させるとともに、それらを横断して検索できる「総合検索」の公開を行うことで、量的に十分な成果をあげることができた。						

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	実施計画に沿って遂行することができた。特により広く当研究所の情報を発信するために英国セインズベリー日本藝術研究所と研究文献情報の相互提供をすすめ、アメリカ・ゲッティ研究所、国立西洋美術館、国立国会図書館など国内外の連携を前向きに協議することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今中期計画にもとづいて文化財研究の専門機関としての汎用性のある情報をデータベース化し、業務に密着した特徴のあるデータ整理を行い、その公開を行うことができた。また、資料閲覧室としての公共性と特性に沿った運営を行うことができた。これら今中期計画の達成を踏まえて、次期中期計画では、当研究所が行う文化財の調査・研究成果を集約し、専門性の高い資料や情報の蓄積・整理、データベースの継続的拡充を行い、レファレンスを充実させてゆきたい。

業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	図書収集・整理・公開・提供((1)-(3))		
【事業概要】			
奈良文化財研究所内における調査・研究及び外部の研究者並びに一般の利用者の調査・研究に資するため、文化財に関する図書・雑誌資料を積極的に収集・整理し、公開・提供を実施する。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 津田保行
【スタッフ】			
渡 勝弥(連携推進課長補佐)、伊藤久美、山内章子、中西晶子、堀内千嘉、永岡美和、久保純子(以下、文化財情報係事務補佐員)			
【主な成果】			
<ul style="list-style-type: none"> ・考古学分野を中心とした図書及び逐次刊行物を収集した。 ・資料の情報をデータ化し、データベースに蓄積してインターネットに公開した。 ・資料を研究員への貸出及び閲覧室において一般利用者へ閲覧提供を行った。 			
【年度実績概要】			
<ul style="list-style-type: none"> ・資料の収集・整理・保管・提供 購入及び寄贈により発掘調査報告書を始めた歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心とする資料の収集を行い、目録の整備を行った。また、国立情報学研究所が構築している総合目録データベース(NACSIS-CAT)へのデータ登録を行い、所外の利用者への情報提供を行った。 故障続きだった図書自動貸出返却装置を更新したことにより貸出返却処理速度が向上した。 ・利用者サービス: 閲覧室において一般利用者へ資料を閲覧提供すると共に、遠隔地からの図書利用については、国立情報学研究所が行っている NACSIS-ILL 及び公共図書館を通じて文献複写・現物貸借サービスを行った。 			
【実績値】			
受入数:			
購入図書	861 冊		
寄贈図書	7,587 冊		
雑誌	1,188 タイトル		
写真	9,173 点		
利用者サービス:			
一般利用者数	443 人		
利用冊数	2,654 冊		
来館者複写件数	1,435 件		
遠隔利用:			
複写受付件数	570 件		
貸借貸出冊数	164 冊		
【備考】			

【書式B/研・セ】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6132

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
評定	B	B	B	B	B	
判定理由 適時性：閲覧請求のあった資料等の提供及び購入希望の資料を積極的に収集・整理・提供を行った。 発展性：図書自動貸出返却装置を更新したことにより貸出返却処理が向上した。 効率性：セルフサービスにより貸出返却処理をスムーズに行った。 継続性：資料の収集・整理・公開・提供を滞ることなく遂行した。 正確性：収集した資料を適切に整理し、適切な場所への保管を行った。						

2. 定量的評価

観点	受入数	利用者サービス	遠隔利用			
評定	B	B	B			
判定理由 ・受入数：購入図書861冊、寄贈図書7,587冊、雑誌1,188タイトル、写真9,173点 ・利用者サービス：一般利用者数443人、利用冊数2,654冊、来館者複写件数1,435件 ・遠隔利用：複写受付件数570件、貸借貸出冊数164冊 いずれも十分な内容であると判断する。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	資料の収集方針及び整理方法については変更することなく継続性を維持することが最優先であり、27年度も適切な収集・整理を行ったことにより資料及びデータの蓄積を行うことができた。また、閲覧室も閉室することなく一般利用者に資料の閲覧提供を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

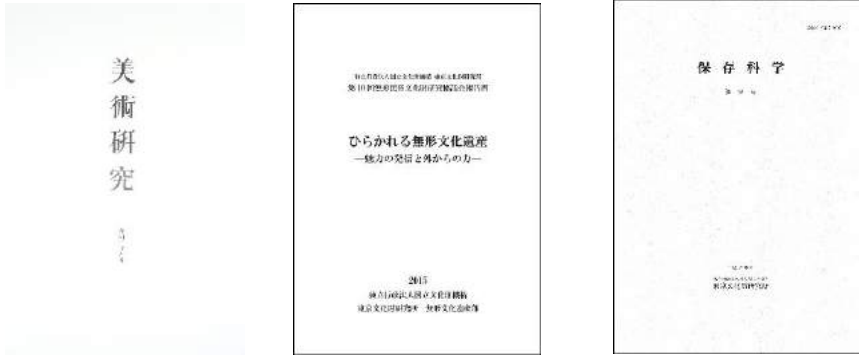
評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間中において滞ることなく資料の収集・整理を継続的に行えた。また、仮庁舎への引っ越し期間以外は閉室せずに一般利用者へのサービスを継続できた。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6211

業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行((2)-①)		
【事業概要】 文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を発行する。			
【担当部課】	東京文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長 亀井 伸雄
【主な成果】 <ul style="list-style-type: none">・『年報』2014年度版(27年6月30日)・『概要』2015年度版・『東文研ニュース』年3回・エントランスロビーパネル展示の実施・『平成26年版 日本美術年鑑』B5版(28年3月)・『美術研究』416号(27年8月)・『美術研究』417号(28年1月)・『美術研究』418号(28年3月)・『無形文化遺産研究報告』第10号(28年3月)・『第10回無形民俗文化財研究協議会報告書』(28年3月)・『保存科学』55号(28年3月)			
			
『美術研究』418号表紙 『第10回無形民俗文化財研究協議会報告書』表紙 『保存科学』55号表紙			
【実績値】 刊行物数：12件 『東京文化財研究所年報』2014年度版 刊行部数500部 『東京文化財研究所概要』2015年度版 刊行部数2,700部 『東文研ニュース』58号 刊行部数2,500部、同59,60号 刊行部数各1,600部 『平成26年版 日本美術年鑑』刊行部数・配布部数各600部 『美術研究』416号～418号 行部数各400部、配布部数各380部 『無形文化遺産研究報告』第10号 28年3月 『第10回無形民俗文化財研究協議会報告書』28年3月 『保存科学』55号(28年3月)印刷部数650部、配布部数485部			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6211

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	正確性		
評定	B	B	B	B		
判定理由 適時性：刊行物を予定数通り刊行し、ロビー展示も年度計画に従って行うことができた。 効率性：定期刊行物について配布先の見直しを行うことで印刷部数を削減し、経費削減に努めた。 継続性：継続的に刊行物を作成した。 正確性：定期刊行物は校正をそれぞれ実施することで、情報の正確性を維持した。						

2. 定量的評価

観点	刊行物数					
評定	B					
判定理由 刊行物数：26年度に引き続き、適切な部数を刊行することができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	年度計画通り定期刊行物を作成した。『日本美術年鑑』については、美術界年史、美術展覧会、美術文献目録を収録して、遺漏なく斯界の動向の記録に努め、『美術研究』では論文、翻訳論文、展覧会評、研究資料のそれぞれにおいて国内外の文化財研究に資するよう充実を図った。『保存科学』第55号については、これまでの査読者1名から2名に変更し、厳正な査読を経ることで、自然科学の学術誌としての一定の水準を維持したまま発刊することができた。ロビー展示ではこれまで近代文化遺産研究室が保存修復などにかかわった案件のうち、代表的な事例について紹介し、文化遺産保護の黒子的存在といえる保存修復技術と新たな技術開発の現状理解を図ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27年度は中期計画最終年度にあたり、中期計画どおり定期刊行物の作成を順調に実施することができた。また、各研究プロジェクトの総括的な研究成果を多く公表することができた。 次期中期計画においても、引き続き、学術誌としての一定の水準を保ちながら刊行する計画である。また、より効果的な情報発信の方法について検討し、ウェブサイトその他インターネットによる情報発信との連携にも努める。

業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平成27年度オープンレクチャー(2)-②)		
【事業概要】 企画情報部の美術史研究の成果を一般に公表することを目的とする。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	企画情報部長 山梨絵美子
【スタッフ】 二神葉子（情報システム研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、津田徹英（文化財アーカイブス研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（文化形成研究室長）、皿井舞（主任研究員）、安永拓世（研究員）、橋川英規（研究員）、中野照男（成城大学特任教授・客員研究員）、三上豊（和光大学教授・客員研究員）、近松鴻二（学習院大学非常勤講師・客員研究員）、吉田千鶴子（東京藝術大学非常勤講師・客員研究員）			
【主な成果】 (1) 第49回企画情報部オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」と題して4講演を2日間にわたり開催した。 (2) 参加者数：247人、アンケートによる満足度：84.2%（回収率：71.7%） (3) 4講演中の3つは講演内容を踏まえて、28年度以降『美術研究』に論文として掲載を予定。			
【年度実績概要】 (1) 企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に、「古典の日」とも連動して開催している。本年はその49回目を迎えた。「モノ／イメージとの対話」を統一テーマに掲げ、金曜日と土曜日の午後、2日間連続で開催した。 第1日目：27年10月30日（金）午後1：30～4：30 東京文化財研究所地下セミナー室 「仁和寺阿彌陀三尊像と宇多天皇の信仰」 皿井舞（企画情報部主任研究員） 「十世紀の画師たち」 増記隆介（神戸大学大学院准教授） 第2日目：27年10月31日（土）午後1：30～4：30 東京文化財研究所地下セミナー室 「与謝蕪村の絵画に見る和漢」 安永拓世（企画情報部研究員） 「池大雅の山水図を考える」 吉田恵理（静岡市美術館学芸課係長） (2) 2日間でのべ247人が聴講した。聴講者にアンケートを実施したところ、177人から回答を得た。満足度に関する答結果は、「たいへん満足した」73人、「おおむね満足した」76人、「普通だった」11人、「不満が残った」4人、無回答13人。アンケート回答者の84.2%から満足度との回答を得た。 (3) 4講演のうち3件については、28年度刊行の『美術研究』に講演内容を踏まえて掲載発表することが『美術研究』編集会議で承認された。			
			
オープンレクチャーの開講（第1日目）			
【実績値】 参加者数 247人 満足度 84.2%（回収率：71.7%）			
【備考】			

【書式B/研・セ】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 6221

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性	正確性		
評定	B	B	A	B		
判定理由 適時性：東京文化財研究所と外部講演者の研究の最新の状況を、「古典の日」にもちなんで広く一般に公表し、時宜にかなうものとなった。 独創性：それぞれの研究成果を単に公表するのではなく、「モノ／イメージとの対話」という独自の統一のテーマで括ることで独創性を打ち出しつつ、これまで培われ・蓄積されてきた成果の公表を行い、それぞれに調査・研究への展望を示して、来聴者の満足度をアンケート集計結果から得ることができた。 継続性：企画情報部オープンレクチャーとして、毎年途切れることなく第49回目の開催を行うことができた。 正確性：講演は、作品に即した実査にもとづく所見を26年度更新した映写機器を用い、詳細な添付資料とともに聴講者に提示し、講演で取り上げた作品とその内容が正確に伝わるように心がけた。						

2. 定量的評価

観点	参加者数	満足度				
評定	B	A				
判定理由 参加者数：両日で会場定員を超える聴講者を得た。 満足度：聴講者アンケートによる満足度は84.2%に達した。最新の研究成果を広く公表する場として、専門性や独創性の高い講演を2日間にわたり開催した中で、4講演を通し聴講者の高い満足を得ることができた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	専門的論文の余地となりうる充実した最新の研究成果にもとづく講演を行い、会場定員を超える多くの聴講者を得、アンケートを実施し高い満足度を得ることができた。 28年度も文化財に関する調査・研究に基づく最新の成果・新知見を、時宜に適応しながら公表し、聴講者数、満足度においても目標値を満たすことを目指したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今期中期計画の趣旨に添いつつ、計画通り毎年度途切れることなくオープンレクチャーを実施し、所期の目的を達成した。次期中期計画においても、文化財に関する調査・研究に基づく最新の成果・新知見を公開講演という同様の形態で一般に公表・還元することを継続したい。

業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	ウェブサイトの運用((2)－③)		
【事業概要】 研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトの充実を図る。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長 二神葉子
【スタッフ】 山梨絵美子(部長)、津田徹英(文化財アーカイブズ研究室長)、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林公治(広領域研究室長)、小林達朗(文化形成研究室長)、皿井舞(主任研究員)、安永拓世(研究員)、橋川英規(研究員)、城野誠治(専門職員)、福永八朗(アソシエイトフェロー)、小山田智寛(研究補佐員)、高橋佑太(研究補佐員) 広報委員(情報システム部会):川野邊渉(文化遺産国際協力センター長) 各部門情報システム部会員:平出秀文(研究支援推進部管理室長)、中濱拓郎(契約係長)、皿井舞(企画情報部主任研究員)、飯島満(無形文化遺産部長)、吉田直人(保存修復科学センター保存科学研究室長)、加藤雅人(文化遺産国際協力センター国際情報研究室長)			
【主な成果】			
<p>(1) 活動報告(和英)や研究会等の開催情報などの広報、及び文化財アーカイブズ研究室と連携しての文献や写真などの所蔵資料、研究成果の発信に関する手法の検討を行った。また、データベース・アーカイブの構築・発信に関する成果発表を行った。</p> <p>(2) ウェブサイトの更新を随時実施し、レイアウトやメニュー構成などデータへのアクセス方法を改善した。また、WordPressによるデータベースを26年度に引き続き随時整備・公開した。さらに、それらの更新情報をソーシャルネットワークサービス(SNS)により発信した。</p> <p>(3) データベースの整備・公開及び英訳により、国内外からの調査研究情報へのアクセスが容易となった。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) ・広報の手法、所蔵資料や研究成果の情報の発信手法の検討は、情報システム研究室及び文化財アーカイブズ研究室を中心に随時行った。また「文化財研究情報アーカイブの構築—東京文化財研究所の取り組み」の表題で平成27年8月27日・28日に開催された「2015 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム in 奈良」で報告した。</p> <p>(2) ・26年度に引き続き、WordPressによるデータベースの構築、既存コンテンツのWordpressデータベース化及び既存データベースへのデータの追加を実施した。さらに、従来は外部サーバで運用されていた、当研究所が構築に関与したデータベースを所内サーバに移行した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「白馬会関係新聞記事」「黒田清輝作品集」「活動報告(日本語版、英語版)」をデータベース化し公開した。また、『美術画報』所載図版データベース」「黒田清輝日記」へのデータ入力を完了した。 ・上記のアーカイブ・データベースは、所蔵資料などを含めた総合検索システムと連携し、横断検索を可能とした。このことで、関連する事象を各種の資料から一度に抽出することが可能となり、調査の効率が改善された。 ・「神楽マップ」「無形文化遺産の記録所在情報データベース」「東京都民俗芸能マップ」「311復興支援無形文化遺産情報ネットワーク」の4件の無形文化遺産関連のデータベースについて、所内の仮想サーバに移行し、当研究所での運用を可能とした。 ・Facebook及びTwitterによるウェブサイトの更新情報の発信を継続して実施した。 <p>(3) ・横断検索及びデータベース相互の関連付けを26年度に引き続きいっそう強めることで、美術界を中心とする文化財に関する動向を詳細に知ることを可能とした。日本美術年鑑所載物故者記事及び日本美術年鑑所載美術界年史彙報について、記載された人名への物故者記事のリンクと、物故者記事においては、当該の人物に関連した美術界年史彙報の記事の一覧が自動生成されるようにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・セインズベリー日本藝術研究所の協力を得てデータベース検索画面を英語化した。また「尾高鮮之助調査撮影記録」の地名表記を英語化し、国外の利用者の便を図った。 			
【実績値】			
シンポジウム報告件数 1件			
データベース公開数(外部) 4件(備考欄①～④)			
データベース移行数 4件(備考欄⑤～⑧)			
(参考値)			
ウェブサイトアクセス件数 1,941,504件(訪問者数)			
【備考】			
①「白馬会関係新聞記事」		⑤「神楽マップ」	
②「黒田清輝作品集」		⑥「無形文化遺産の記録所在情報データベース」	
③「活動報告(日本語版)」		⑦「東京都民俗芸能マップ」	
④「活動報告(英語版)」		⑧「311復興支援無形文化遺産情報ネットワーク」	

【書式B/研・セ】
(様式2)施設名 東京文化財研究所処理番号 6231

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	A	A	B	A	A	A
判定理由 適時性：現在、ウェブサイトによる情報公開は必須であり、海外への発信力も求められている。そのような需要に対し、いち早く対処することができた。 独創性：Wordpressによる研究情報のデータベースには新規性があり、その活用が独創的であるといえる。また、東京文化財研究所が所蔵する一次資料は他にないものである。 発展性：Wordpressによる研究情報のデータベースはテキストのみならず画像も扱うことが可能なため、今後も多様なデータを検索可能な形で公開することができる。 効率性：ウェブサイトの大きな変更は外部委託しているが、週2回程度来所して所員と協議しながら作業を実施し、短時間で目的に適合したウェブサイトを構築できている。データベース構築では外部委託は最小限にとどめ、ほとんどは職員が対応することで費用対効果が大きく向上している。 継続性：ウェブサイトの更新は複数の職員があたっているが、毎回の作業の進捗状況について書面によって情報共有することで、継続的なデータ更新作業を行うことができています。 正確性：データの公開にあたっては、外部に公開する前に所内限定で公開したうえで複数の職員により内容を確認し、繰り返し精査したうえで外部公開を行っている。						

2. 定量的評価

観点	シンポジウム 報告件数	データベース 公開数	データベース 移行数		
評価	B	A	A		
判定理由 シンポジウム報告件数：情報発信に関する取り組みについて国内外に向けて発信することができたため。 データベース公開数：データを作成した部局から公開を依頼されたデータベースを全て公開した。また、これまでも公開されていたもののデータベースではなかった情報をデータベース化し、当該データへのアクセス数が大きく向上するなど、研究情報の外部発信がいっそう促進されたため。 データベース移行数：従来、別々の外部サーバで公開していた無形文化遺産関連の4件のデータベースについて、仮想サーバの活用により物理サーバの台数を増やすことなく、また、滞りなく所内サーバへの移行と運用を実現できたため。					

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ウェブサイトの運用については、適時性、効率性、継続性、独創性、発展性、正確性が認められた。また、Wordpressによるデータベースに関しては、テキスト・画像によるデータベースを横断検索可能な形で4件公開することができた。さらに、従来は外部サーバで公開していた4件のデータベースを所内に移行することができた。加えて、これまでの調査研究の成果を国際シンポジウムで発表することができた。したがって実績の総合評価も初期の目標を上回る成果が認められると結論した。28年度以降も、データベースの構築と更新、データベース化が可能な情報のデータベース化に加え、データベースの文化財及びその保護への活用という観点から調査研究を実施していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ウェブサイトの情報へのアクセスの利便性向上、データの充実、速やかな更新を実施することができた。ウェブサイトのアクセス件数もこれまで以上に増加している。このような実績から、27年度までの中期計画の実施状況は初期の目標を大きく上回ると考えた。次期中期計画においても、情報資料の収集・整備及び発信は継続される。多くのデータベースの公開など、当研究所の広報・研究成果の公開をより効果的に実施するための業務を実施していくとともに、高精細画像を含む情報共有の仕組みについて引き続き研究を実施していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行、公開講演会・現地説明会等の開催、ウェブサイトの充実（(2)－①②③）		
【事業概要】文化財に関する調査研究に基づく成果について、定期的な刊行物を発行する。公開講演会、現地説明会等の開催により、積極的に公開・提供する。研究所の事業・研究成果をはじめ、催し物案内など様々な広報を実施する。新たな情報発信をすべく更なる内容の検討を行う。			
【担当部課】	奈良文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長 松村恵司
【スタッフ】			
【主な成果】			
<p>(1) 紀要等 2 点、ニュース 2 種 8 点、合計 10 点を刊行した。</p> <p>(2) 公開講演会は、例年実施している公開講演会（奈良）を 2 回、東京講演会を 1 回、飛鳥資料館特別展記念講演会等を 3 回開催した。いずれも多く参加者があり、日頃の当研究所研究成果を一般に発信できた。</p> <p>(3) 発掘調査に伴う現地説明会等を 3 回実施した。</p> <p>(4) 全国遺跡報告総覧を公開した。 (5) 3D Bone Atlas Database を公開した。 (6) 古代地名検索システムを公開した。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) ・「奈良文化財研究所紀要 2015」27.6 月刊、3,000 部、「奈良文化財研究所概要 2015」27.9 月刊、2,700 部 ・奈文研ニュース「No.57」27.6 月刊、「No.58」27.9 月刊、「No.59」27.12 月刊、「No.60」28.3 月刊、各 3,000 部 ・埋蔵文化財ニュース「No.162—現生木年輪年代標本リスト—」、「No.163—環境考古学 11 貝類標本リスト—」、「No.164—埋蔵文化財から防災・減災を目指したの新たな取り組み—」、「No.165—2014 年度埋蔵文化財関係統計資料—」各 28.3 月刊、各 2,500 部</p> <p>(2) 公開講演会等 ※満足度 A(大変満足)、B(おおむね満足)、C(あまり満足でない)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 116 回公開講演会 27 年 6 月 20 日(土) 来場者数 200 人 平城宮跡資料館資料館 講演者数 3 名 アンケート結果=回収数 114 人 回収率 57.0% 満足度 A=81 人(87.1%)/B=11 人(11.8%)/C=1 人(1.1%) ・第 117 回公開講演会 27 年 11 月 7 日(土) 来館者数 190 人 平城宮跡資料館講堂 講演者数 3 名 アンケート結果=回収数 118 人 回収率 62.1% 満足度 A=93 人(92.1%)/B=8 人(7.9%)/C=0 人(0%) ・第 7 回東京講演会「発掘以降から読み解く古代建築」27 年 10 月 25 日(土) 聴講者数 345 人 有楽町朝日ホール 講演者数 6 名 アンケート結果=回収数 162 人 回収率 47.0% 満足度 A=115 人(92.7%)/B=9 人(7.3%)/C=0 人(0%) ・飛鳥資料館春期特別展「はじまりの御仏たち」記念講演会 27 年 5 月 9 日(土) 参加者数 88 人 飛鳥資料館講堂 講演者数 1 名 アンケート結果=回収数 59 人 回収率 67% 満足度 A= 59 人(100%)/B=0 人(0%)/C=0 人(0%) ・飛鳥資料館秋期特別展「キトラ古墳と天の科学」連動企画講演会 27 年 11 月 8 日(日) 参加者数 151 人 多摩六都科学館（東京都） 講演者数 3 名 主催 多摩六都科学館・奈文研 ・飛鳥資料館秋期特別展「キトラ古墳と天の科学」記念講演会 27 年 10 月 31 日(土) 参加者数 126 人 明日香村中央公民館 講演者数 4 名（総合討議 講演者+4 名 計 8 名） アンケート結果=回収数 82 人 回収率 65% 満足度 A=71 人(87%)/B=5 人(6%)/C=0 人(0%)/無回答 6 人(7%) <p>(3) 発掘調査現地説明会等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飛鳥藤原第 186 次（藤原宮大極殿院）発掘調査 1,548 m² 現地説明会 27 年 10 月 12 日(月) 参加者 1,112 人 アンケート結果=回収数 278 人 回収率 25.0% 満足度 A=123 人(45.5%)/B=139 人(51.9%)/C=7 人(2.6%) ・平城第 559 次（興福寺中室・経蔵・鐘楼）発掘調査 835.5 m² 現地説明会 27 年 12 月 20 日(日) 参加者 1,200 人 アンケート結果=回収数 248 人 回収率 20.6% 満足度 A=134 人(54%)/B=109 人(44%)/C=5 人(2%) ・平城第 552 次（平城京朱雀大路跡）発掘調査 756 m² 現地見学会 28 年 3 月 5 日(土) 参加者 680 人 アンケート結果=回収数 342 人 回収率 50.3% 満足度 A=192 人(56.1%)/B=148 人(43.3%)/C=2 人(0.6%) <p>(4) 全国 21 の国立大学が連携して取り組んだ全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクトを奈良文化財研究所企画調整部が引き継いで運用を開始。奈良文化財研究所のホームページから、全国遺跡報告総覧として公開を開始した。</p> <p>(5) 環境考古学研究室の松井章前埋蔵文化財センター長を中心として現生動物の骨格標本を精力的に収集し、菊地大樹客員研究員との共同研究により三次元計測による立体的な骨格図譜データベースを作成し、奈良文化財研究所のホームページから公開を開始した。</p> <p>(6) 史料研究室渡辺晃宏室長の科研費補助金の研究成果として古代地名検索システムを作成し、奈良文化財研究所のホームページから公開を開始した。</p>			
【実績値】			
<p>(1) 刊行数：紀要 1 点、概要 1 点、奈文研ニュース 4 点、埋蔵文化財ニュース 4 点、計 4 種 10 点</p> <p>(2) (3) 講演会等開催回数：9 回（公開講演会等開催 6 回、現地説明会等開催 3 回）</p> <p>（参考値）ウェブサイトアクセス件数：605,211 件</p>			
【備考】			

【書式B/研・セ】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6232

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	A	A	A	B	B
判定理由 適時性：調査研究の成果を適時に刊行できた。発掘調査成果など広く一般に公開し、その必要性に答えることができた。利用度の高い貴重な学術資料をインターネット上で公開した。 独創性：公開は、当研究所の調査・研究内容の新規性及び卓越性を持たせ実施することができた。奈良文化財研究所ならではの独創的なデータベースを公開した。 発展性：聴講者、参加者は、多数かつ多種にわたり様々な分野への影響が期待される。多方面においての利用が見込まれ、今後の活用が期待される。 効率性：各種データベースをインターネットで公開することにより、利用者における調査・研究の大幅な負担の削減が予想される。 継続性：継続的な定期刊行物として刊行できた。様々な媒体を活用して、調査・研究成果の継続的な公表を行った。奈良文化財研究所のサーバから公開することにより、恒久的な提供と維持が可能である。 正確性：アンケート結果に見られるように多数が満足する正確性を持った内容であった。長年の調査・研究の成果をデータベース化したものである。						

2. 定量的評価

観点	刊行数	講演会等 開催回数				
評定	B	B				
判定理由 刊行数：当初の計画通りに刊行することができた。 講演会等開催回数：公開講演会、現地説明会等ともに予定どおり実施できた。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定期刊行物は、研究成果を公表するものとして計画的に刊行できた。また、多様な研究成果、特に継続的な調査研究の成果を専門家だけでなく、一般の方にもわかりやすい形での刊行に努めた。 公開講演会については6回実施、現地説明会等については3回実施し、いずれも多数の参加者があった。これらの参加者に対して行ったアンケートでは、9.5割以上の方から「大変満足である」または「おおむね満足である」という結果を得た。 「ウェブサイトの充実」としては、一般には入手し難い利用価値の高いデータベースを複数公開できたことは賞賛に値する。かなりの成果であると認められる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	紀要、概要、ニュースの刊行は計画通りに順調に実施できた。 公開講演会、現地説明会等の開催は計画どおり所期の目標を達している。今後も、調査研究の成果に基づく講演、現地説明会等の内容及び配付資料の充実、アンケート調査による参加者ニーズの把握を図る。さらに事業広報を充実させることにより参加者数の増加と満足度の向上を図る。最終年度として、講演会の講演者やその内容をさらに検討し、参加者の満足度を高められた。 特に、一般には入手し難い利用価値の高いデータベースを複数公開できたことは賞賛に値し、ウェブサイトの充実としてはかなりの成果であると認められる。今後も継続していく。

業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平城宮跡資料館、飛鳥資料館、藤原宮跡資料室における展示公開((3)-①②③)		
<p>【事業概要】平城宮跡に関する理解促進、ならびに当研究所が行う平城宮・京の発掘調査及び研究の成果公開や情報発信のため、平城宮跡資料館において常設展・企画展を実施する。飛鳥資料館第1、第2展示室の常設展示の維持管理を行うとともに、展示の手直しを適宜行う。都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）庁舎に併設された藤原宮跡資料室及びエントランスにおいて、常設展示、発掘調査成果の速報展示などを実施し、展示公開の充実を図る。</p>			
【担当部課】	企画調整部、飛鳥資料館、都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	企画調整部長 杉山洋、学芸室長 石橋茂登、都城発掘調査部長 玉田芳英
<p>【スタッフ】加藤真二、中川あや、中村玲（以上、展示企画室）、梶原孝次（連携推進課）、西田紀子、若杉智宏、小沼美結（以上、飛鳥資料館）、尾野善裕、清野孝之、西山和宏、降幡順子、山本崇、森川実、廣瀬寛、和田一之輔、諫早直人、大澤正吾、川畑純、清野陽一、大林潤、前川歩、大谷育恵、金宇大、山本亮、福嶋啓人（以上、都城発掘調査部）、井上直夫、栗山雅夫、飯田ゆりあ（以上、企画調整部写真室）</p>			
<p>【主な成果】</p> <p>(1) 平城宮跡資料館にて、夏のこども展示「平城京”ごみ”ずかん-ごみは宝-」、秋期特別展「地下の正倉院展-造酒司木簡の世界-」を開催した。</p> <p>(2) 飛鳥資料館常設展示室の展示内容を部分的に改装した。</p> <p>(3) 飛鳥資料館にて、春期特別展「はじまりの御仏たち」、夏期企画展 第6回写真コンテスト応募作品展「ひさかたの空-いにしへの飛鳥想ふ-」、秋期特別展「キトラ古墳と天科学」、冬期企画展「飛鳥の考古学 2015 - 飛鳥の古墳調査最前線 -」を開催した。また、明日香村活性化事業「飛鳥光の回廊」に参加した。</p> <p>(4) 藤原宮跡資料室にて、常設展示及び発掘調査成果の速報展示などを通年で実施し、展示公開の促進を図った。</p>			
<p>【年度実績概要】</p> <p>(1) ・夏のこども展示「平城京”ごみ”ずかん-ごみは宝-」平成27年7月11日～9月23日 27年で3回目となる夏の子供向け展示。本年は、平城宮・京跡で出土した遺物のうち、不要になってごみとして捨てられたものや、ごみ捨て場、リサイクルなどに焦点を当てて紹介した。関連イベントとして、ギャラリートーク「ゴミドコさんとハカセの”ごみ”トーク」、親子ワークショップ「平城京すごろくを作ろう!」を開催した。</p> <p>・秋期特別展「地下の正倉院展-造酒司木簡の世界-」27年10月17日～11月29日 本年で9回目となる年に一度の木簡の実物展覧会。本年は平城宮跡造酒司出土木簡の重要文化財指定を記念した展示を行った。関連イベントとして、ギャラリートークを行った。</p> <p>(2) 飛鳥資料館の第1展示室、第2展示室、特別陳列室の展示品を部分的に変更した。</p> <p>(3) ・春期特別展「はじまりの御仏たち」27年4月24日～6月21日 出土品を中心に飛鳥時代のさまざまな小仏像を展示した。記念講演会1回、ギャラリートークを5回実施した。</p> <p>・夏期企画展 第6回写真コンテスト応募作品展「ひさかたの空-いにしへの飛鳥想ふ-」27年7月28日～9月13日 写真教室を27年9月14日に開催した。入賞作品を配した「うちわ」を作成し会場で配布した。</p> <p>・秋期特別展「キトラ古墳と天科学」27年10月9日～11月29日 飛鳥資料館開館40周年を記念し、キトラ古墳天文図を中心として中国式星座の世界と古代の天の科学を紹介した。記念講演会1回、ギャラリートーク4回、関連イベントを2回実施した。</p> <p>・冬期企画展「飛鳥の考古学 2015 - 飛鳥の古墳調査最前線 -」28年1月29日～3月6日 飛鳥の終末期古墳にスポットを当て、最新の調査成果を含めて紹介した。</p> <p>・明日香村活性化事業「飛鳥光の回廊」27年8月29日～30日 前庭にろうそく約2,000本を並べて可能な限り点灯し、夜間無料開館した。</p> <p>(4) 藤原宮跡資料室にて、通年にわたり常設展示を実施した。速報展示コーナーにて、藤原宮大極殿院（182次調査）・藤原宮東方官衙北地区（183次調査）・檜隈寺瓦窯（181-4次調査）の出土遺物を展示した。また、飛鳥寺出土文字瓦の特集展示を行い、記者発表を行った。橿原市の解説ボランティアによる土日開館を実施した。各地の博物館等の要請に応じ、当調査部保管遺物ならびに模型・模造品などの貸与・作成を行った。</p>			
<p>【実績値】平城宮跡資料館：入館者数105,334名（目標値85,300名）、開館日数307日。特別展1回、企画展1回（ミニ展示4回）。</p> <p>飛鳥資料館：入館者数42,749名（目標値48,800名）、開館日数320日。特別展2回、企画展2回（講演会等11回）。</p> <p>藤原宮跡資料室：来室者数：10,933名（目標値4,509名）、開室日数：360日。</p>			
<p>【備考】</p> <p>①『平城京”ごみ”ずかん-ごみは宝-』27.7.11、フルカラー16頁、5,000部刊行。</p> <p>②『地下の正倉院展-造酒司木簡の世界-』27.10.17、フルカラー16頁、7,000部刊行。</p> <p>③中川あや「出土品の認識、理解につながるハンズオン展示の実践」『奈良文化財研究所紀要2015』27.6</p> <p>④飛鳥資料館研究図録第62冊『はじまりの御仏たち』27.4.24、2,000部刊行。</p> <p>⑤うちわ「ひさかたの空-いにしへの飛鳥想ふ-」27.7、3,000部作成。</p> <p>⑥飛鳥資料館図録第63冊『キトラ古墳と天の科学』27.10.9、3,000部刊行。</p> <p>⑦飛鳥資料館カタログ第33冊『飛鳥の考古学2015』28.1.29、2,000部刊行。</p>			

【書式B/研・セ】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6311

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	A	A	B	A	B
判定理由 適時性：平城宮跡資料館秋期特別展では、27年度に平城宮造酒司出土木簡が重要文化財指定を受けたのを記念して、代表的な指定木簡を一堂に公開する展示を開催した。造酒司出土の各種遺物などもあわせて総合的に造酒司を紹介する内容で、27年度にふさわしい展示が実施できたといえる。 独創性：平城宮跡資料館夏期企画展では対象を子供としたため、現代の生活ともかかわる「ごみ」をテーマとして、従来の歴史的な情報提供型ではなく、クイズや体験展示など盛り込んだ参加型のオリジナリティのある展示とした。 発展性：平城宮跡資料館の従来企画展・特別展に比して小規模なミニ展示を4回開催した。予算や準備時間を小規模に抑えられ、かつ来館者には変化のある資料館展示を印象づけることができるため、今後もミニ展示という枠で様々な展示が行ないやすくなるという点で応用性が期待できる。 効率性：平城宮跡で行われるイベントと連動して夜間開館を行い、普段資料館に来館しない層へ効率よく資料館の存在をアピールすることができた。 継続性：平城宮跡資料館夏期企画展は過去2カ年度好評であった子供向け展示を27年度も開催した。秋期特別展の地下の正倉院展は年間を通じて最も来館者が獲得できる、平城宮跡ならではの人気の高い展示であり、27年度で9回目の開催となる。いずれの展覧会も、26年度以前とコンテンツは全く変えて、来館者の満足度を高める努力をしている。 正確性：企画展・特別展ともに、出土品を管理、研究する都城発掘調査部の協力の下に行なっており、展示構成立案段階、リーフレット入稿前に都城発掘調査部員に入念に内容確認してもらうことで、学術的正確性を担保している。						

2. 定量的評価

観点	入館者数	開館日数	特別展開催数	企画展開催数		
評定	B	B	B	A		
判定理由 入館者数：目標値 136,809 名に対して、実際の入館者数 159,016 名（達成率 116.2%）。 開館日数：例年同様に計画通り、3施設とも公開できた。 特別展開催数：目標値（年3回）を達成した（達成率 100%）。 企画展開催数：目標値（年2回）を達成した（達成率 150%）						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	定性的評価、定量的評価、いずれの観点からも、当初の目標を達成し、十分な成果を上げることができた。企画展等、講演会等の企画を目標以上に盛んに開催し、図録類を積極的に刊行することで集客力をあげる努力をしているとともに、平城宮跡資料館で4回開催した特別展・企画展とは別の時宜を得たミニ展示や飛鳥資料館での常設展示の一部更新など、展示の企画や方法を工夫する運営を行っている点が評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	平城宮跡資料館においては、22年のリニューアルオープン以降、地下の正倉院展、発掘速報展、また、25年以降は夏のこども展示も連続的に実施しており、27年度も充実した内容の展示を行なった。開催数の達成はもちろん、平城宮跡にかかわる多彩なコンテンツを、様々な層の来館者に楽しんでもらえる様な展示内容を提供できたという点で、量のみならず質的にも所期の目標を十分に達成していると判断する。飛鳥資料館においては、常設展示を毎年一部分ずつ更新することで、中期的にはかなりの更新がなされてきた。3施設において、文化庁や地方自治体、あるいは他館との協力を積極的に行っており、研究成果の公開や飛鳥の歴史と文化を発信するためにさまざまな工夫をしている点が評価でき、全体としては順調といえる。 今後はより分かり易い展示や外国語対応などを重視していく必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	文化庁平城宮跡管理事務所の運営への協力 (4)-①		
【事業概要】			
文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等における連携協力、文化庁の各種事業、発掘調査等の連絡調整及び文化庁施設の維持管理及び修繕等に対して提案、助言、連絡調整等協力する。			
【担当部課】	研究支援推進部	【プロジェクト責任者】	研究支援課長 今西康益
【スタッフ】			
江川 正(宮跡等活用支援係長)、三本松俊徳(宮跡等活用支援係係員)			
【主な成果】			
(1)文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等における連携協力、文化庁の各種事業、発掘調査等の連絡調整及び文化庁施設の維持管理及び修繕等に対して提案、助言、連絡調整等協力し、文化庁の平城宮跡等整備事業に協力した。			
【年度実績概要】			
(1)文化庁平城宮跡等管理事務所の文化庁施設の公開・活用等に対し、以下のとおり積極的に協力した。			
○文化庁が実施する各種事業及び発掘調査等に係る連絡調整			
○宮跡内施設(建物、諸設備、工作物等)の整備、維持管理及び修繕等に係る文化庁への助言			
	件名		件名
1	平城宮跡高圧配電線路設備改修	19	宮内省安全施設(ポストコーン)修理
2	東院庭園中央建物屋根檜皮改修	20	大極殿・朱雀門基壇等クリーニング
3	平城宮跡草刈工事	21	東院庭園苑路柵修理
4	大極殿及び朱雀門風鐸損傷の修理	22	遺構展示館駐車場舗装修理
5	宮内省東(復原東大溝)の橋修理	23	遺構展示館南棟屋外排水改善
6	宮跡内外灯の本設への切替工事	24	平城宮跡内水路改善
7	朱雀門消防訓練の実施にかかる協力	25	平城宮跡北辺境界調査
8	遺構展示館駐車場出入口植栽の剪定	26	遺構展示館警備員詰所更新
9	大極殿免震装置点検	27	宮内省施設(WC)照明改修
10	東院庭園植栽の補植	28	東院庭園井戸ポンプ更新
11	東院庭園池循環設備保守点検業務	29	水路転落防止柵設置
12	大極殿院水路漏水対応	30	遺構表示植栽剪定
13	平城宮跡内施設等修繕計画	31	侵入防止柵修理・更新
14	平城宮跡地等整備、修繕等(27年度実施分)の調整について	32	防犯通信整備
15	遺構展示館駐車場電線管修理	33	平城宮跡西側県道沿い植栽剪定
16	大極殿高御座クリーニング	34	大極殿・朱雀門塗装修理
17	佐紀池困障改修	35	特別史跡平城宮跡及び藤原宮跡地内における歴史的環境維持業務
18	宮内省進入防止柵修理	36	東院西南部苑路応急修理
○住民等からの要望や意見の文化庁への取次ぎ			
・平城宮跡への来訪者、利用者、近隣住民等からの防火、防犯、植生及び運営等の意見			
【実績値】			
【備考】			

【書式B/研・セ】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6411

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	正確性				
評定	B	B				
<p>判定理由</p> <p>適時性：緊急性の高い事案に対して、提案、助言及び協力等を適時行った。</p> <p>正確性：現在の状況及び過去の経緯等に基づいた、提案、助言及び協力等を適切に行った。</p>						

2. 定量的評価

観点						
評定						
判定理由						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等に積極的に協力し、文化庁の要請に応じ、文化庁施設の整備、維持管理及び修繕等に対して適時、的確に対応している。次年度計画については、平城宮跡の国営公園化を見据え、国等が行う、保存管理、公開活用事業についても協力していく。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化庁管理事務所が行う文化庁施設の公開・利用等の連絡、文化庁の各種事業、発掘調査等の連絡調整、文化庁施設の整備、維持管理及び修繕等の相談に対して適切に対応できている。また、文化庁施設（復原施設・便益施設等）の計画的整備に対しても現況に基づいた維持管理の提案、助言協力等が適切に行われている。今後は、平城宮跡の国営公園化を見据え、国等が行う、保存管理、公開活用事業についても協力していく。

業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	文化庁・国土交通省が行う平城宮跡の復原・整備への協力（(4)－①）		
【事業概要】			
(1) 国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院復原への協力を行う。 (2) 文化庁と国土交通省が行う平城宮跡等の公開・活用事業への協力を行う。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 渡辺晃宏
【スタッフ】			
神野 恵、芝 康次郎、浦 蓉子、青木 敬、小田裕樹、丹羽崇史、今井晃樹、林 正憲、石田由紀子、中川二美、馬場 基、山本祥隆、桑田訓也、箱崎和久、鈴木智大、大橋正浩、村山聡子、坪井久子、山本 崇、清野孝之、森崎一貴、清野陽一、西山和宏、福嶋啓人、前川 歩（以上、都城発掘調査部）、林 良彦、番 光（以上、文化遺産部）、小池伸彦、高妻洋成、脇谷草一郎（以上、埋蔵文化財センター）、津田保行、今西康益、江川 正、三本松俊徳（以上、研究支援推進部）			
【主な成果】			
(1) 第一次大極殿院の建物復原研究のため、所内検討会を開催し記録集を作成した。また、これまでの検討から復原研究報告書の作成を進めた。 (2) 文化庁や国土交通省が開催する会議等や平城宮跡内における整備に対して、専門的・技術的な援助・助言を行った。 (3) 12年度までに奈文研が行った平城宮跡の整備についての報告書を刊行した。			
【年度実績概要】			
(1) 国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院復原への協力 <ul style="list-style-type: none"> ・ 所内検討会を3回開催し、発掘遺構のほか復原建物に用いる飾金具に関する検討を深めた。 ・ 大極殿院の復原諸建物について、扉や窓といった細部形式の検討を進め復原案に反映させた。 ・ 27年度に行った上記の検討会の記録を冊子として発行した(①)。 ・ 27年度の検討成果を奈文研紀要に発表した(②)。 ・ これまでの検討成果について、資料をまとめ、復原調査報告書の作成を進めた。 			
(2) 文化庁や国土交通省が行う平城宮跡等の公開・活用事業への協力 <ul style="list-style-type: none"> ・ 文化庁が開催する「平城宮跡及び藤原宮跡等の保存整備に関する検討委員会」に出席し、平城宮跡及び藤原宮跡の発掘調査について発表し助言を得、研究に反映した。 ・ 平城宮跡内の整備・管理工事にあたり、発掘調査や立会調査を行って記録を作成した。 			
(3) 昭和45年度から12年度までに奈文研が行った平城宮跡の整備についての報告書『平城宮跡整備報告書』を刊行した。			
			
第一次大極殿院建物復原に関する所内検討会 （発掘現場での検討）			
【実績値】			
・ 検討会開催数 3回（第一次大極殿院建物復原に関する所内検討会） ・ 論文数等：4件（①～④）			
（参考値）			
・ 平城宮跡内の整備工事に伴う立会調査出動件数：19件92日 ・ 文化庁や国土交通省が開催する会議等への出席：1回			
【備考】			
① 『第一次大極殿院復原検討会記録13』（内部資料）28年3月 ② 中川二美「鬼瓦の分布からみた平城宮の造営－第一次大極殿院の復原研究20－」『奈文研紀要2016』28年6月（予定） ③ 村山聡子「古代建築の柱間装置の仕様－第一次大極殿院の復原研究21－」『奈文研紀要2016』28年6月（予定） ④ 『平城宮跡整備報告書』（28年3月）			

【書式B】
(様式2)施設名 奈良文化財研究所処理番号 6412

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	B	B	A	B	B
判定理由 適時性：必要な検討を適時に行い、復原設計に反映させた。頻繁な立会調査への迅速な対応も含め、文化庁や国土交通省の各種要請に対し、的確に対応することができた。 独創性：遺構と遺物の精緻な観察や分析、さらにそれらをもととした精緻な検討を行った。 発展性：『平城宮跡整備報告書』等の刊行により、今後の平城宮跡の整備・活用に資する基礎的資料をまとめた。 効率性：事前に研究室内での検討を行い、所内検討会の論点を整理して議論の効率化を図った。頻繁で過密なスケジュールの立会調査等にあたり、事前打ち合わせ等を通じて、作業効率の向上に努めた。 継続性：所内検討会の継続的開催、及び継続的な資料の収集や分析を、立会調査も含めて行った。 正確性：精緻な研究や分析に基づきつつ、復原案を検討した。各種の対応や助言は的確に行った。						

2. 定量的評価

観点	検討会開催数	論文数等				
評定	B	B				
判定理由 検討会開催数：目標回数3回を達成した。 論文数等：目標件数3件以上を達成した。						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・第一次大極殿院の復原研究を計画通り行い成果を得た。また、検討会記録を当初計画通りに刊行した ・整備に伴う立会調査等を、遅滞なく適切に行うことができた。 ・『平城宮跡整備報告書』を刊行し、平城宮跡における整備の事例をまとめることができた。世界遺産に登録されている平城宮跡の整備についてまとめた初めての本格的な文献であり、今後は世界遺産委員会等への説明資料としての利用も期待できる。 <p>以上より、定性的評価、定量的評価ともに成果が認められる。 28年度以降も、第一次大極殿院の装飾的細部や形式について、より具体的な形態の検討を行ってゆく予定である。また今後も研究の成果をわかりやすく公表できるよう、さらに工夫をしていきたい。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<ul style="list-style-type: none"> ・中期計画最終年度に『平城宮跡整備報告書』を刊行し、平城宮跡における整備の事例をまとめることができた。また、国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院復原への協力ため、復原研究を着実に進めた。 ・文化庁と国土交通省が行う平城宮跡の公開・活用事業に関連する会議等に参加した。 ・文化庁や国土交通省が行う平城宮跡整備工事等への立会調査等を遅滞なく行った。 <p>なお、第一次大極殿院の建物復原研究では、実際に建物を建てるために細部形式の検討が必要になっている。27年度は扉や窓の形式の検討をおこなったが、今後も遅滞なく細部形式の検討を行っていききたい。また、これらの研究の成果を報告書としてまとめ、全国の遺跡整備に資する研究を継続して実施していきたい。平城宮跡全体の整備に対しても、文化庁や国土交通省と連携を図りながら、これまでの整備のノウハウを活かし、よりよい保存・整備・活用ができるよう尽力したい。</p>

業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内の体験学習館の建設への協力((4)-①)		
【事業概要】			
国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内の体験学習館の建設とその展示に対して、助言・協力をを行う。			
【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長 石橋茂登
【スタッフ】			
西田紀子(学芸室研究員)、若杉智宏(学芸室研究員)、小沼美結(アソシエイトフェロー)			
【主な成果】			
<p>(1) 国営飛鳥歴史公園事務所の依頼に基づき、キトラ古墳体験学習館(仮称)の展示に資する奈文研所蔵・保管資料の中から協議に基づき展示に用いる資料を選定し、体験学習館に搬入して展示する作業に協力した。</p> <p>(2) 都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)と協力して国営飛鳥歴史公園事務所と展示内容について助言・協力をを行った。</p>			
【年度実績概要】			
<p>(1) 飛鳥資料館及び都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)が保管しているキトラ古墳関連の出土品、土層断面剥ぎ取り、レプリカ、再現品、陶板などの中から、文化庁・国土交通省と協議の結果、土層断面剥ぎ取りと陶板を体験学習館の展示に供することとなり、当該資料を提供した。</p> <p>(2) 国営飛鳥歴史公園事務所から提示された体験学習館及び公園内解説パネル案、展示品の模型類、映像資料などについて、学術的内容に関する助言と資料提供を、文化庁とともに、都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)と協力して行った。協議等は計17回行い、VTR収録の立ち会いを2回、模型製作時の工場での監修を2回、体験学習館の建設現場の視察を行った。</p>			
			
<p>建設中の体験学習館</p>			
【実績値】			
協議等回数 計17回、VTR収録立ち会い2回、模型製作監修2回			
【備考】			

【書式B/研・セ】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6413

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	A	A	B	A	B	A
<p>判定理由</p> <p>適時性：28年度開館予定にむけ国土交通省と受託業者が具体的な展示内容や建物・内装を製作する作業が進む中で、状況に応じて必要な情報や資料を提供し、展示、解説の内容について学術的な側面から協力することができた。</p> <p>独創性：キトラ古墳、国営飛鳥歴史公園内檜隈地区の発掘調査と研究を行った実績のもと、他機関ではできない協力を行った。</p> <p>発展性：当研究所の知見を踏まえた展示が行われることで、広く研究成果を周知し、今後の活動に資することが期待できる。</p> <p>効率性：高い頻度で文化庁、当研究所、国営飛鳥歴史公園事務所及び関連の業者等が対面して協議したことで、効率的に情報を共有し、問題点を理解し対応することができた。</p> <p>継続性：当研究所の長年にわたる調査研究成果を活かした協力があった。このプロジェクトを継続してきたことにより築いた各機関の協力体制によって、円滑な協議等の実施と、具体的な展示模型やパネルなどの製作が行われた。</p> <p>正確性：文化庁及び実際に調査研究を担った当研究所が情報提供したことにより、正確な情報を活かすことができた。</p>						

2. 定量的評価

観点	協議等回数				
評定	B				
<p>判定理由</p> <p>協議等回数：頻繁に協議等を行うことで有効な協議や情報提供等を行うことができた。</p>					

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	体験学習館の展示を作り上げていく過程で、その都度必要とされる情報を適時的に提供し、展示における内容の正確性についても有効な協力を行うことができた。28年度の開館に向けて順調に進行しており、これまでの調査研究に携わってきた当研究所の特性を最大限に活かした業務であると評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今次中期計画では国土交通省の要請に基づき、随時、適切な協力を行ってきた。特に、キトラ古墳体験学習館の開館を28年度に控え、27年度は体験学習館での展示内容に関して、質量ともに従来を大きく上回る展示品や情報の提供、助言、校閲、監修など多方面の協力を実施した。高松塚古墳・キトラ古墳等の保存・活用について、保存科学、考古学等の多方面から長年にわたり調査研究を実施してきた当研究所ならではの経験・蓄積を活かした協力であり、文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力の成果を迅速に反映させて充実した内容とすることができた。次期中期計画では開館後の公開活用の面で、さらに緊密な協力をしてゆくことが期待される。

業務実績書

中期計画の項目	6 情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	国土交通省が行う平城宮跡展示館（仮称）の建設への協力（(4)-①）		
【事業概要】			
国土交通省が建設予定の平城宮跡展示館・詳覧ゾーンに関して、展示品の選定や展示内容の企画立案と、それらを効果的に行うための展示評価、類似展示施設の状況調査を実施する。			
【担当部課】	企画調整部展示企画室	【プロジェクト責任者】	企画調整部長 杉山洋
【スタッフ】			
加藤真二(展示企画室長)、中川あや(展示企画室研究員)、中村 玲(展示企画室アソシエイトフェロー)			
【主な成果】			
(1) 展示評価のための展示室簡易模型製作、インタビュー調査、ワークショップを実施した。 (2) 世界遺産隣接型展示施設や注目される展示手法をとる展示施設等の視察調査を実施した。 (3) 詳覧ゾーン基本設計の展示内容を一部修正し、展示候補品を再選定のうえ、リストと資料カードを作成した。			
【年度実績概要】			
(1) 26年度にまとめた詳覧ゾーン基本設計案の課題等を克服するため、展示評価を、展示評価の専門家とともに実施した。展示室簡易模型は、26年度展示案を原寸の50分の1サイズで立体化したもので、平面図やパースのみでは把握しづらい展示空間の有効性などを検証するために作成した。この検証により得られた改善点を反映した簡易模型も作成した。インタビュー調査は、2つの簡易模型を用いて、観覧時の印象や子供の行動を想定してもらったもので、育児経験者を対象に実施した。ワークショップは、詳覧ゾーン展示の展示手法について意見交換する目的で、様々な分野の展示業務従事者を対象に実施した。			
(2) 平城宮跡展示館と同様の世界遺産隣接型の展示施設について、展示施設と遺跡双方の関連づけ、外国人対応の内容・表現等について調査を実施した。この他、露出展示、バリアフリー、映像の多用、文献の展示、大型模型の展示等の注目される展示手法をとる展示施設について、学芸員への聞き取りも行いながら、設置の意図・開館後の問題点などについて情報を収集した。		展示業務従事者ワークショップの様子 (手前が簡易模型)	
(3) (1)と(2)の調査成果をふまえ、詳覧ゾーン基本設計展示案の見直しを行い、展示内容を修正した。修正を反映した平面図を作成した。具体的な展示手法の検討の過程では、コーナーごとにラフスケッチを作成した。平面図、ラフスケッチは展示企画協力のもと専門業者が行った。また、新規の展示内容に基づいて、展示候補品を選定し、リストと資料カードを作成した。 詳覧ゾーン以外のゾーン（公園案内ゾーン、ガイドンスゾーン）の展示計画案について専門的な見地から指導を行い、展示構成について詳覧ゾーンとのバランスや関連性について検証した。			
【実績値】			
(参考値)			
展示評価簡易模型2点、インタビュー調査1回（回答数11件）、ワークショップ1回（参加者8名）			
他の展示施設の視察調査9施設			
詳覧ゾーン平面図1点、コーナーラフスケッチ27点			
展示候補品リスト1式、資料カード199件			
国土交通省地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所平城分室との定例会8回			
展示評価専門家との打ち合わせ7回			
展示業者との打ち合わせ9回			
【備考】			

【書式 B / 研・セ】

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6414

(様式 2)

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
評定	B	B	A	B	A	A
<p>判定理由</p> <p>適時性：28 年 1 月より開始した実施設計をスムーズに進められるような各種調査をそれまでに実施し、当該段階にふさわしい適切な修正を行うことができた。</p> <p>独創性：展示室の簡易模型を用いた調査やワークショップによって、従来の平面図上の検討では見えてこなかった視点が得られ、利用者の興味を一層引きつつ、観覧しやすい新たな展示案を提案することができた。</p> <p>発展性：27 年度に行った様々な調査・検討成果を即座に模型や平面図に反映したことで、28 年度の実実施設計を効率よく進められる素地が整った。</p> <p>効率性：27 年度は 4 月～12 月の間、展示業者が未定であったため、奈文研側で平面図やラフスケッチを業者に依頼して作成し、滞ることなく展示案検討作業を効率よく進めることができた。</p> <p>継続性：28 年度の実実施設計と、実施設計完了後におこなう展示準備では、27 年度に引き続き展示評価をおこなう予定である。展示評価は施設開館まで一貫性のある調査が重要であり、27 年度は 28 年度につながる制作途中評価の調査を行うことができた。</p> <p>正確性：国交省、奈文研、展示業者（27 年 1 月～）の三者が関わる業務であり、検討過程の詳細や、決定事項の情報共有を齟齬なく行うため、打ち合わせ議事録の正確な資料化をおこなった。</p>						

2. 定量的評価

観点						
評定						
判定理由						

3. 総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	<p>詳覧ゾーンの実実施設計の開始に向けて、27 年度当初より各種調査を滞りなく行い、迅速に展示内容をブラッシュアップすることができた。また、28 年 1 月より連携を始めた実施設計担当展示業者とも、情報共有を速やかに行い、スムーズに実施設計を開始することができた。さらに、展示評価、視察調査の成果をもとに、基本設計の課題を具体的に改善した図面、模型を作成、これらを実施設計に反映させることができた。これにより、28 年度の実実施設計にも順調に進むことができる。</p>

4. 中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	<p>25～27 年度は、基本設計と実施設計の間の空白期間で、当初は基本設計の見直しが計画されていなかったが、この三ヵ年、展示評価や視察調査を継続的に実施してきており、基本設計での課題を克服するための大幅な内容変更を行うことができた。基本設計の見直しを三ヵ年かけて行ったことにより、来館者にとって平城宮跡についてよりわかりやすく、魅力的な内容で、かつ、観覧しやすい内容になったと考える。次期中期計画初年度となる 28 年度は、実施設計が 6 月に完了し、以降は展示施工に入る。その段階では、具体的な展示文章や画像などの内容吟味や、効果的な演示手法について、内容詳細を固めていく予定である。</p>

業務実績書

中期計画の項目	6 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティア事業の実施、平城宮跡防災・防犯パトロール「平城宮跡みまもり隊」への参加、NPO法人等への支援（(4)－②③④）		
【事業概要】 平城宮跡への来訪者に当研究所の調査研究成果を発信するとともに、平城宮跡の歴史や文化財に対する理解を深めてもらうため、平城宮跡資料館や遺構展示館、東院庭園、朱雀門、第一次大極殿の復原建物等の案内・解説を行う平城宮跡解説ボランティアを運営する。平城宮跡内でのマナー向上や防災・防犯に関して、平城宮跡みまもり隊へ参加することにより、平城宮跡内でのマナー向上や防災・防犯に寄与する。平城宮跡で活動するNPO法人平城宮跡サポートネットワークに対して当研究所施設を活動の場所として提供、文化財に関する学習会等への講師派遣等の支援を行う。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課 研究支援課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長 津田保行 研究支援課長 今西康益
【スタッフ】 加藤真二(展示企画室長)、中川あや(展示企画室研究員)、中村玲(企画展示室アソシエイトフェロー)、梶原孝次(連携推進課課長補佐)、江川 正(宮跡等活用支援係長)、三本松俊徳(宮跡等活用支援係係員)			
【主な成果】 (1)平城宮跡の解説をより多くの来訪者に効率よく行い、文化財への理解を大いに広げることができた。 (2)平城宮跡来訪者に平城宮跡内でのマナーの向上や防災・防犯活動を行っていることを理解してもらうことができた。みまもり隊の活動が近隣住民、来訪者に浸透した結果、一般人の参加者が26年度を上回った。 (3)NPO法人平城宮跡サポートネットワークへの支援を行った。			
【年度実績概要】 (1)・定点解説のほか、予約及び当日受付した来訪者を対象に「ツアーガイド」として宮跡内散策に同行し解説を行った。 ・活動者に対しては、当研究所が主催する専門研修及び他機関の文化財に関するボランティアガイドが解説する場へ赴き、臨地研修を実施した。 ・活動拠点でもある平城宮跡資料館において、企画する展示ごとに展示趣旨の解説を、その都度当研究所研究員によって実施した。 (2)・平日は平城宮跡内を巡回し、火災や宮跡内にある看板等の毀損予防のパトロール活動を行った。月1回の土日のボランティア活動では、平城宮跡来訪者に防犯メッセージが書かれたティッシュペーパーの配布や声かけを行い、マナー向上や防災・防犯意識を高める活動を行う等、事務局として連絡調整を行った。 ・年2回、文化庁平城宮跡管理事務所、国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所平城分室、奈良県、奈良市、所轄警察署及び所轄消防署の行政機関やNPO法人平城宮跡サポートネットワークによる連絡会議を開催しパトロール活動の報告を行った。 (3)・NPO法人平城宮跡サポートネットワークに対して、活動場所、講師の派遣、資料の提供など、積極的な活動支援を行った。 ・「平城宮跡クリーン大会」、「子ども歴史教室」を共催で実施するとともに、「平城宮跡歴史講座」、「遺跡見学会」、「平城宮跡探検隊」等を後援し、年間を通して連続した支援ができた。			
【実績値】 (1)平城宮跡解説ボランティア登録数：133名 (参考値) (1)・ボランティア解説を受けた来場者延べ人数：80,407人 ・解説活動日数：306日 ・解説活動者延べ人数：3,777人(1日当たり：12.34人) ・解説ボランティアに対する学習会等回数：4回 平城宮跡資料館夏期企画展の展示研修：1回、平城宮跡資料館秋期特別展の展示研修：1回、 講演形式専門研修：1回、臨地ガイド研修：1回 (2)・平均参加者数：11.17人 ・一般参加者数：16人 (3)当研究所が支援し、NPO法人平城宮跡サポートネットワークが実施した主な事業名称、回数、活動場所、参加者数 ・「平城宮跡クリーン大会」、1回開催、平城宮跡内、参加者数220名(27年4月11日) ・「子ども歴史教室」、1回開催、平城宮跡資料館講堂・平城宮跡内、参加者数14名(27年8月1日) ・「平城宮跡歴史講座」(講演会)、3回開催、平城宮跡資料館講堂、参加者数525名(27年5月24日、9月27日、28年1月24日) ・「遺跡見学会」、1回開催、参加者数18名(講師派遣)(27年10月5日) ・「平城宮跡探検隊」、1回開催、参加者数50名(27年11月1日) ・「木簡に出会う 平城京を巡るツアー」、1回開催、参加者数40名(28年3月6日)			
【備考】			

【書式B/研・セ】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 6421

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性
評価	B	B	B	B	B
判定理由 適時性：平城宮跡解説ボランティア事業では、来訪者の様々な知識需要・必要性に対し、その場にて十分な対応ができた。時期によって異なる事案（行楽シーズン、花火等）に対して、啓発の方法・パトロール開始時間等を変更して活動を行った。 発展性：平城宮跡解説ボランティア事業においては、多種多様な層の来訪者へ解説ができ、海外からの来訪者に対する反響が大きかった。また、NPO法人等への支援を通じて、子どもたち等の体験学習が実施された。 効率性：解説ガイド申込の際に、来訪者へのアドバイスなど行うことで、解説に係る時間的・人的投資は、効率よくできた。また、NPO法人等への支援を通じて、当研究所の施設を有効かつ効果的に使用し、参加者への広報・成果発表につながった。 継続性：年間を通して、平城宮跡解説ボランティア事業はとぎれず継続した解説者の配置を行うことができた。平城宮跡防災・防犯パトロールにおいては、毎月の活動日をあらかじめ設定し、定期的に行うことにより、参加者が欠員することなく、継続的に事業を行うことができた。NPO法人への支援は、NPO法人平城宮跡サポートネットワークが13年11月に認証されて以降、継続的に実施されてきた。 正確性：平城宮跡解説ボランティア事業においては、研修で得た知識・経験を基に正確な情報を伝えることができた。					

2. 定量的評価

観点	平城宮跡解説ボランティア登録数			
評価	B			
判定理由 平城宮跡解説ボランティア登録数：平城宮跡のガイドに必要な人数は確保されている。				

3. 総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ガイドに必要なボランティアを確保し、解説ボランティアに対しては、特別展など展示内容の講習会や公開講演会への参加を通して、登録ボランティアの知識を高め、解説ボランティアガイドを行うにあたっては、来訪者に対し文化財の理解を広めることに大いに貢献した。 平城宮跡防災・防犯パトロールについては、一般参加者数が26年度を上回っており、従来の関係行政機関・NPO法人等だけで行う活動ではなくなってきている。27年度以降については、従前の方法に加えて、新たな試み(所内、展示公開施設及び公開講演会等での周知)を実施することにより、一般の参加者を増加させる。 NPO法人平城宮跡サポートネットワークが実施する子ども歴史教室、平城宮跡探検隊、平城宮跡歴史文化講座等への講師派遣、活動場所提供等の支援を行い、協力することによりその活動の活性化に貢献した。

4. 中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	解説するボランティアへの学習・研修の機会を提供し、そのレベル向上につなげ、広報による解説受講者数の増加を図ることなど、ボランティア運営の積極的な実施ができた。今後もこのペースを維持し、当研究所の情報発信、さらには平城宮跡の公開活用につながるよう力を注ぐ。次期中期計画期間においては、新しく解説ボランティアを募集し、研修を行うことによって、登録ボランティアの育成を行う。 平城宮跡防災・防犯パトロールにおいては、行政機関・NPO法人等以外の一般参加者数が増加しており、みまもり隊の活動が平城宮跡の利用者や近隣住民に浸透したと思われるため、今期中期計画は、予定通りに実施できた。